

令和 4 年度 【 学園研究費助成金 < A > 】 研究成果報告書

学部名 現代マネジメント学部

フリガナ	ウエ	バヤシ	シゲル
氏名	植	林	茂

研究期間 令和 4 年度

研究課題名 なぜ銀行は破綻したか ―中部銀行破綻についての経営と行政対応に関する
オーラル・ヒストリー手法による分析―

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	植林 茂	現代マネジメント学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

かつて御厨貴[2002]は我が国のバブル崩壊後の金融破綻に関して、「今日では、あたかも台風一過のように、九十年代の金融危機も過去の話とみんな口を噤んでいる。―中略― 銀行や証券会社をはじめさまざまな企業がどう対応したか、あるいはなぜ対応しきれなかったかということを明確に分析することが必要不可欠である。」と述べたが、残念ながらこうした状況は一向に改善されていない。しかし、90年代の金融破綻を大きな要因、基点としてわが国の「失われた三十年」と言われた状況が発生し、それが現時点でも我が国経済に大きな影響を与えていることは紛れもない事実である。そこでオーラルヒストリーの手法を使い、過去に銀行経営に携わっていた直接の経営当事者から詳細にヒアリングを行うことで、中小地方銀行が破綻する過程について詳細に分析し、その背景にある金融行政と金融機関破綻との関係を浮き彫りにすることを狙った。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

まず、主として 90 年代以降の金融行政についてレビューし、新設・改廃された法律・制度・ルールをフォローしたり、当局者の発言を明らかにすることで、金融行政がその時々政治的な都合で大きく変化してきているというそのスウィングの大きさを明らかにした。その上で、オーラルヒストリーの手法を使って、金融行政が不良試験問題の一掃を企図して極めて厳しいスタンスで金融機関に対して臨んでいた 2003 年初に破綻した中部銀行の破綻時の頭取である梅井尚志氏に長時間(丸二日間)のヒアリングを行うことで、当時の行政当局の問題先金融機関に対する姿勢や具体的な対応を明らかにするとともに、中部地区の比較的収益力の乏しい中小金融機関「中部銀行」が、なぜ、どのように破綻していったのかを、経営当事者の視点から明らかにした。具体的には、事象についての詳細な時系列年表に沿っての確認、管財人報告書の内容と経営者認識の詳細な突合作業、多数の新聞記事、約 200 に及ぶ質問項目による。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究の中心的な部分である中部銀行の元頭取である梶井尚志氏へのヒアリングでは以下のような点が明らかになった。

- ① 中部銀行の破綻は、大口貸出の焦げ付きや追い貸しなどにより不良債権による信用コストが大幅に増加し、これが期間収益力を大きく上回り、自己資本を食いつぶしても対応できないといった典型的なバブル期における銀行破綻のケースとは異なる印象があること。
- ② 預金保険機構・金融管財人の公的な報告書は、一部に同行の事情や事実関係について必ずしも正しく把握しているとは言えない部分があるほか、当時の不良債権処理についての通説をなぞっただけとみられる部分もあるなど、現時点でみれば、必ずしも的確に分析しているとは言えない部分が含まれていることが判明したこと(公的な管財人報告書は必ずしも的確な分析とはなっていない)。
- ③ 元頭取が経営継続断念を決断した理由としては、ペイオフ解禁を前に預金の流出が止まらなかったことが最も大きく、さらに、その背景には増資の失敗により自己資本比率の引き上げが難しくなりこれが広く報道されたというレピュテーション面が大きかったと認識していること。
- ④ 預金の係留が進まなかった背景として元頭取は、同行が長年非地元のオーナーによる経営、日銀からの天下り経営者の継続といった事情もあり、必ずしも地元根深く根付き、広く県民からの支援を受け得る「県民銀行」として認識されていなかったことが一因であるとの認識を持っていること。
- ⑤ 当時の同行リスク管理体制等を窺うと、不良債権管理体制や償却・引当への取組、モニタリング体制等について必ずしも十分ではない部分がみられ、こうした側面がマイナスに働いたほか、同行の収益確保への前向きな取り組みに対する足枷となった面を否めないこと。また、収益力が脆弱で、これを大きく改善させない限りは早晚破綻に至る可能性が高かったのではないかと思われること。
- ⑥ 当時、行政当局は、現在の業界育成的なスタンスからは考えられないような極めて厳しいスタンスで対応に臨んでおり、当行と行政当局の間には密接な協力関係・信頼関係が構築されていたとはいえ、元頭取は増資失敗の原因が金融庁の妨害工作にあると認識していたこと。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①中部銀行	②オーラルヒストリー	③バブル崩壊	④中小地域銀行
⑤預金流出	⑥銀行破綻	⑦信用コスト	⑧レピュテーションリスク

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

【論文発表】

- ・植林茂 [2023] 「なぜ、どのように銀行は破綻したのか?—中部銀行についてのケーススタディ」『社会とマネジメント 第20巻』p.p.1-54、2023年3月

【研究発表等】

- ・2022年12月16日 埼玉大学大学院「金融特論」における特別講義(実施済み)
- ・第26回放送大学大学院比較地域研究会「中部銀行破綻についてのケーススタディ」2023年3月26日